幼児の共感と母親の共感との関係

渡 辺 弥 生* 瀧 口 ち ひ ろ**

RELATION BETWEEN EMPATHY OF CHILDREN AND THAT OF MOTHERS

Yayoi WATANABE

Chihiro TAKIGUCHI

Study I examined the development of empathy in young children and presented a new index of empathy for use with young children. The subjects were 140 children aged three to six years old. Each child was taken individually into a room and was asked which card of 4 kinds of cards showed a "happy (or sad, surprised, angry) face?." They were then read stories with pictures and were asked which card explained the boy (or girl)'s feeling in these stories. The results indicated that even young children could discriminate facial expressions and understand feelings of others, and that empathy developed with age. Study II examined the relation between the empathy of children and that of their mothers. The subjects were 140 children and 235 mothers. The mothers' empathy was measured on the Mehrabian and Epstein's scale (1972). These results support that a higher level of empathy in mothers has more impact on the empathy of children than that of a lower level, and that the mother's warmth and nurturance may produce strong positive feelings in children.

Key words: empathy, children, development, mother, facial expression.

問 題

従来、共感について多くの定義がなされてきたが、一般に2つの定義に大別される。すなわち、情動的側面を強調する定義と認知的側面を強調する定義である。前者の定義では Stotland ら (1963) の「他人の情動状態を経験する結果、他人の感情と同じ情動を経験すること」という定義が代表的である (Berger, 1962; Stotland & Dumm, 1963)。この定義によりとらえられる共感を Mehrabian & Epstein (1972) は情動的共感と命名している。一方、認知的側面を強調する定義には、Dymond (1949) の「他人の思考、感情、行為の中に自分を想像的に置いて、その人の世界を構成すること」や Milgram (1960) や Strayer (1966) の「ある状況において、他人の反応を予測する能力」が代表的である。しかし、近年

は、Feshbach (1975) や高野 (1982) のように、共感の認知的側面と情動的側面との両者を包括した定義が優勢になってきている。久保 (1981) は、共感を「気持ちの理解」と置き換え、「他者の情動のからまった認識世界を想定すること」ととらえている。また、Feshbach (1976) は共感モデルを提示しており、3つの成立要因を提唱している。すなわち、第1の要因は、最も基本的な認知水準であり、他人の情動の状態を弁別し、それを命名する能力であり、第2の要因はより高度な認知能力の水準、あるいは社会的把握力を反映するもので他人の考えや役割を予測する能力であり、第3の要因は、情動的な反応性であって、情動を共有し、現に自分の見ている否定的、あるいは肯定的な情動を経験する能力である。

定義では、情動的反応と認知能力を切り離して考えない方向に落ち着いてきたものの、そうした共感をどのように測定するかについては、いまだ確立した方法がないのが現状である。しかも、これまで試みられてきている方法は測定の容易な大人を対象とするものがほとんどで

* 筑波大学 (University of Tsukuba)

** 明星幼稚園 (Myojyo Kindergarten)

あり、共感を発達的に検討したものは僅かである。幼児を対象にしたものなどは、無いに等しい状態である。例えば、情動的共感の測定方法としては、Mehrabian と Epstein (1972) のものがよく知られているがこれは質問紙形式であり、また、Krebs (1975) の GSR や心拍数などによる生理的指標をとる方法があるが、これは情動の開始と強さがとらえられても、情動の種類までをとらえられないことや、測定のための準備が簡易でないなどが指摘されている。また、Batoson ら(1981) の情緒形容詞の評定を用いた方法などがあるが、いずれも高度な言語能力に頼れず、しかも長時間の実験に耐えられない幼児、児童には不適切であると考えられる。幼児を対象にしたものでは、最近表情による分析システムを用いた研究があるが (Izard & Dougherty, 1982)、これらは共感を情動的反応としてとらえ、幼児の他者に対する認知的な理解を排除して考えていることや表情の分析にかなりの訓練が必要などの問題点があげられる。

幼児期は、感情、記憶、思考、社会性などすべての面において、その能力の変化、及び成長が著しい時期である。したがって、それらと密接に関連する共感の発達についてもこの時期の発達は見のがすことができないと考えられる。また、共感の発達の研究においては、共感の芽生える時期として、不可欠で貴重な資料といえるであろう。したがって、本研究では言語能力に左右されず、簡易な方法として絵とストーリーを用いるとともに、表情の弁別能力を利用した表情のマッチングによる測定法が考案された。本研究においては、共感を情動的反応のみに限定せず、情動及び認知を含みうるものとしてとらえる。ただし、幼児を対象にそれらを区別する測定方法をすぐさま考案することは難しいため、「ある状況に直面した他人の立場に立ち、他人の感情を共有し、情動的に反応すること」と、2つの側面が相互作用したものとして共感をとらえることにした。本研究では、従来のような幼児の共感の測定に関してのみにとどまらず、幼児の共感に最も深く関与していると考えられる母親の共感との関係を明らかにすることを目的とした。子どもの共感に関わる要因についてはほとんど検討されてきていないが、母子間の相互作用は子どもの共感性を育てるうえで大きな影響を及ぼしていることが予測されるからである。したがって、まず、測定方法を考案し、実施することにより幼児の共感について明らかにし (研究Ⅰ)、つぎに調査により得られた母親の共感との関係を検討する (研究Ⅱ)。

研究Ⅰ

幼児の共感について検討する。仮説としては、加齢とともに表情における感情の弁別能力が増すとともに、共感性が高くなること、また、一般に女兒が男児よりも共感性が高いといわれていることから性差が見られること、さらに、兄弟数及び、家族数が多いほうが、人間間の相互作用が多いことから共感性も高くなることが予測された。

方法

1. 幼児の共感測定

被験児) M幼稚園年少児45名 (3才3か月～4才2か月)、年中児41名 (4才3か月～5才2か月)、年長児54名 (5才6か月～6才5か月)、計140名。男女約同数。

実験期間) 昭和60年7月～10月

実験材料)

a. 顔の表情カード4種類 (喜び・悲しみ・驚き・怒り):

幼児の表情を識別するために Walden & Field (1982) により用いられた材料を検討し、修正したもの。先行研究では、各表情がかなり異なり、統制されていなかった

FIG. 1 顔の表情カード

ため、頭髮、衣服、耳に関する刺激条件を削除し、まゆ、目、鼻、口の4つの部位に限定してできるだけ顔の構成要素が等質になるように配慮して作成された (FIG. 1)。

b. マッチング・カード (男児用, 女児用): 感情の表出が判断されえないポーズをとり表情がないもの (FIG. 2)。

FIG. 2 マッチング・カード
(男児用)

c. 場面カード: 「喜び」「悲しみ」「驚き」「怒り」の各感情

FIG. 3-1 喜びの場面Ⅰ
(男女共通)

FIG. 3-2 悲しみの場面Ⅱ
(男女共通)

FIG. 3-3 驚きの場面Ⅲ
(女児用)

に關係する場面を設定したカードであり、各感情別にさらに3種類ずつ作成された。すなわち、①物と關係する場面、②生物が關係する場面、および③人間と關係する場面、であった(FIG. 3)。ただし、喜びの①と②、悲しみの②、驚きの①と②、怒りの②と③は男女共通であった。

d. 記録用紙、ストップ・ウォッチ、筆記用具(手続)実験者は、あらかじめ幼稚園の各クラスの保育に参加し、幼児達とラポールをとったのちに実験が実施された。個別実験により、被験児はひとりずつ実験室に連れていかれた。実験者と対座したのち、名前、年齢、クラスが尋ねられた。被験児の前に、4種類の表

情カードが並べられ、次のように教示された。「ここに、お顔の絵が4つあります。この中で、嬉しい顔(悲しい顔、びっくりした顔、怒った顔)はどれですか。『これ』って差して教えて下さい」。他の3つの表情カードについても同様に行われた。4つの教示順序及び配列順序は被験児ごとにランダムに変えられた。正しい反応が選択された場合には「○」誤った反応が選択された場合には、その反応が記録された(認知得点)。なお、被験児の正誤に対する関心が強いので記録事項が見えないように配慮された。つぎに、4枚の表情カードが呈示されたまま、マッチング・カードが呈示され、以下のような教示が与えられた。「この子は太郎君(花子ちゃん)って言います。太郎君は今、お顔がありません。だから、○○ちゃんにお顔をに入れてもらいたいです。これから、お姉さんがいろいろなお話をします。そして、『太郎君はどういうお顔をしますか』って聞きますから、この4つのお顔の中から選んで下さい」。教示が理解されたかどうかを確認された後、場面カードが呈示され、各場面ごとの説明が行われた。説明の内容はTABLE 1のとおりである。呈示順序は、同種のカードが連続することの

TABLE 1 各場面のストーリー

喜び

- ①今日は太郎君(花子ちゃん)のお誕生日です。お父さんが大きなプレゼントをかって来てくれました。お母さんもおいしいごちそうをたくさん作ってくれました。
- ②お花の種をまいて、毎日、一生懸命お水をあげました。今日、朝起きて、お水をあげようと思ったら、ちゃんと芽が出ていました。
- ③今日はお休みの日です。遊びにいきたくないなあ、と思っていたら、仲良しのお友達がみんなで「遊ぼう」って遊びに来てくれました。

悲しみ

- ①大好きな飛行機(お人形)で遊ぼうと思って、おもちゃ箱から出してみたら、飛行機のはねがおれていました(お人形の手がとれていました)。この前、ポイッとほうりこんでいたからでしょう。
- ②太郎君(花子ちゃん)のお家では、小鳥さんを飼っています。毎日、太郎君がえさをあげて、かわいがっていますが、このごろ元気がありません。幼稚園から帰ってただいまを言おうと思ったら、小鳥さんが死んでいました。
- ③お家のそばに住んでいた仲良しのお友達が、遠い所へ引っ越して行ってしまいました。もう、一緒に遊べません。

驚き

- ①高い所にお花が飾ってありました。そうしたら、グラグラストーンと花びんが落ちてきました。
- ②お外へ出ようと思って、玄関のドアを開けたら、パーッと猫が飛び込んで来ました。
- ③かくれんぼをしています。太郎君(花子ちゃん)が鬼です。あのへんにいるかな、と思って行ってみたら、へいの所からお友達が「ワーッ」とおどかしました。

怒り

- ①いじめっ子のゴンちゃんがやってきて、太郎君(花子ちゃん)の大事にしている怪獣(パンダさん)を無理にとって壊してしまいました。
- ②みんなで花壇を作って、お花をたくさん植えました。そうしたら、だれかが入って来て、めちゃめちゃにしまいました。せっかく一生懸命植えたのに。
- ③いじめっ子のゴンちゃんが太郎君(花子ちゃん)よりも小さい女の子に、とおせんぼをしていじめています。そういうのを見たら?

ないようにランダムになされた。ただし、実験後の被験児の気分における残存効果を配慮して、最後に呈示されるカードは喜びのカードであるようにした。各場面の説明は、Feshbach & Roe (1968)を参考にして作成されたものが用いられた。

被験児が実験者の意図した表情カードを選択した場合には「○」、そうでない場合はその指示された表情の種類が記録された。被験児が「わからない」と答えた場合には「○○ちゃんが『これかな』って思うお顔でいいよ」などの言葉により、反応が促されたが、それでも回答が得られない場合には、次の場面カードへと進められた(共感得点)。

TABLE 2 学年別・性別ごとの認知得点の正反応

	喜 び	悲 し み	驚 き	怒 り
年少				
男児 (N=23)	17(73.9)	17(73.9)	22(95.7)	16(69.6)
女児 (N=22)	16(72.7)	19(86.4)	22(100.0)	17(77.3)
全体 (N=45)	33(73.3)	36(80.0)	44(97.8)	33(73.3)
年中				
男児 (N=22)	18(81.8)	21(95.5)	22(100.0)	18(81.8)
女児 (N=19)	16(84.2)	17(89.5)	19(100.0)	16(84.2)
全体 (N=41)	34(82.9)	38(92.7)	41(100.0)	34(82.9)
年長				
男児 (N=25)	25(100.0)	25(100.0)	25(100.0)	23(92.0)
女児 (N=29)	28(96.6)	29(100.0)	29(100.0)	27(93.1)
全体 (N=54)	53(98.2)	54(100.0)	54(100.0)	59(92.6)

数値は人数、()内は%

分析方法

- a. 認知得点：表情認知が正しく答えられた場合には1点、誤った反応が為された場合には0点が与えられた。各表情カードごとの得点を合計したものが認知得点とされた。したがって、認知得点のレンジは0点から4点までであった。これは表情の弁別能力の測度とされた。
- b. 共感得点：実験者の意図していた表情が得られた場合には2点を、意図された表情と異なるが、選択された反応においても共感が働いている可能性があると判断されるものを1点、共感が得られていないと判断される反応、及び「わからない」と回答された場合には0点が得点化された。共感が見られるか否かの判断は、反応理由、及び表情等の観察記録により考慮された。例えば、喜び①（プレゼントをもらう場面）においては、喜びの表情が選択されると2点、驚きの表情が選択されると1点、悲しみや怒りの表情が選択されると0点が与えられた。各感情ごとに得点を加算したものを感情別共感得点とした。なお、これらのカード、教示の理解については予備研究においてあらかじめ確かめられていた。

2. 個人別変数

被験者の月齢、母親の年齢、家族構成などは幼稚園側

TABLE 3 学年別・性別の共感得点の平均とSD

	喜 び	悲 し み	驚 き	怒 り	全 体
年少					
男児 (N=23)	4.22(1.31)	3.78(1.59)	4.09(1.16)	4.57(1.12)	16.65(3.26)
女児 (N=22)	4.50(1.22)	3.77(1.38)	4.36(1.34)	3.64(1.36)	16.27(2.54)
全体 (N=45)	4.36(1.26)	3.78(1.48)	4.22(1.15)	4.11(1.32)	16.47(2.90)
年中					
男児 (N=22)	4.64(1.50)	4.45(1.50)	4.50(1.06)	4.36(1.05)	18.05(3.71)
女児 (N=19)	5.37(0.83)	5.21(1.51)	4.79(1.03)	3.74(1.05)	19.11(2.56)
全体 (N=41)	4.98(1.27)	4.80(1.54)	4.63(1.04)	4.07(1.08)	18.54(3.23)
年長					
男児 (N=25)	5.72(0.46)	5.48(0.71)	5.20(0.82)	4.96(1.20)	21.36(1.70)
女児 (N=29)	5.55(0.78)	5.03(1.40)	5.14(0.92)	4.39(1.07)	19.76(2.17)
全体 (N=54)	5.63(0.65)	5.24(1.51)	5.17(0.88)	4.39(1.07)	20.50(2.11)

()内はSD

の協力により、資料として収集された。

結 果

1. 認知得点に関する測定結果

被験児140名が分析の対象とされた。TABLE 2 に学年別、性別の認知得点の正反応の人数の割合が示された。

2 要因の分散分析が行われた結果、学年の主効果のみ有意であった ($F=8.14$, $df=2/134$, $p<.001$)。ダンカンの多重比較がなされたところ、年長群と年少群、年中群と年少群との間に有意な差が認められた。また、年長群と年中群の間にも10%レベルで有意な傾向が見られ、加齢につれて認知得点が増える傾向が見出された。

2. 子どもの共感得点

a) 総合共感得点

TABLE 3 に学年別、性別の共感得点の平均と標準偏差とが示される。これにもとづいて、分散分析が行われたところ、年齢の主効果と交互作用が有意であった ($F=28.19$, $df=2/134$, $p<.001$; $F=2.82$, $df=2/134$, $p<.10$)。多重比較の結果、年長群と年中群、年中群と年少群、年長群と年少群の何れの間にも有意な差が見出され、年齢が増えるにつれて共感が高くなることが示された。年齢と性差については、加齢とともに性差が見られ、年中では女子のほうが男子よりも共感得点が高いが、年長では男子のほうが女子よりも高くなっていた。

b) 感情別共感得点

感情別に学年と性の2要因の分散分析が行われたが、「喜び」の共感得点、「悲しみ」の共感得点、「驚き」の共感得点においてはいずれも学年の主効果のみが有意であった ($F=17.74$, $df=2/134$, $p<.01$; $F=14.40$, $df=2/134$, $p<.01$; $F=10.55$, $df=2/134$, $p<.01$)。すなわち、年齢が増えるとともに各感情の共感性が高くなる傾向が認められた (TABLE 3)。「怒り」の共感得点については、年齢差は見られなかったが、他の3つの感情別共感得点には見出されなかった性差の主効果が見られ、男子のほうが女子よりも共感性が高い傾向が認められた ($F=23.98$, $df=1/134$, $p<.01$)。

2. 各指標間の関係

認知得点、総合共感得点、及び感情別共感得点の相関が見られたが、いずれも有意な相関が示された (TABLE 4)。各感情間の相関は、「喜び」と「怒り」、「悲しみ」と「驚き」、「驚き」と「怒り」を除いたすべての間で有意であった。また、兄弟数、家族数と子どもの共感との関係が見られた。そのさい、3人兄弟が1名、7人家族が6名、8人家族が1名と個体数が少ないことから除かれた。その結果、兄弟数による差

TABLE4 各変数間の相関

	認知 得点	共感 得点	喜び	悲しみ	驚き	怒り
認知得点		.46**	.41**	.26**	.26**	.24**
総合共感得点			.73**	.75**	.55**	.51**
喜び共感得点				.43**	.39**	.12
悲しみ共感得点					.16 [Ⓔ]	.22*
驚き共感得点						-.01
怒り共感得点						

** p<.01 * p<.05 [Ⓔ] p<.10

は見られなかったが、家族数において有意な差が見出された (F=3.48, df=4/128, p<.01)。多重比較の結果、3人家族と4人家族、4人家族と5人家族、5人家族と6人家族の間に有意な差が見出された。したがって、家族数が増加するに伴って、子どもの共感性が高くなることが示された。

考 察

1. 認知得点

140名の被験児のうち111名 (79%) が完全回答をしており、「喜び」「悲しみ」「驚き」「怒り」のすべての表情に対して、正しく弁別していることが示された。年少児においても62%が正確に答えており、表情の弁別能力がかなり早い時期から獲得されはじめていることがわかる。認知得点に反映された能力は、Feshbach (1976) の共感モデルの第1 要因 (他人の情動の弁別能力) に相当すると考えられるほか、「他人の情動の状態を弁別し、それを命名する能力は4、5才ころから急速に発達する」という実験結果と一致する。認知得点と性別との関係は見られず、認知弁別能力においては性差の無いことが示唆された。感情別に認知得点を見ると、全体の平均値は「怒り」が最も高く、「悲しみ」「喜び」「驚き」の順になっていた。被験者の個々の回答を見てみると「喜び」と「驚き」を明確に区別していないものが多かった。Woodworth (1938) や Schlosberg (1941) においても、「幸福」と「驚き」が類似したものであり、誤った判断が多いという結果が得られており、われわれの感情表出においてかなり似通っていると考えられる。また、われわれ、特に子どもが喜ぶ場合には、何かに驚いた結果に伴うことが多いことがこうした結果を導いたと思われる。また、「怒り」の表情認知が特に高かった結果に関しては、「幸福」「悲しみ」「怒り」「驚き」の順に発達するとした Borke (1973) や Izard (1971) の研究結果と異なるが、「怒り」を感情の根源とし、乳児期から幼児期、児童期を通じて最も苦しい情緒経験であるという大脇 (1958) と一致する。

2. 共感得点

24点満点中、20点以上が48%、19点以上が62%を占めており、3才から6才の幼児においても共感の測定が可能であることが示された。本研究では、言語表出能力の変数が介入しないように、質問に対する応答形式をとらず、表情のマッチング形式をとった。すなわち、場面を与えて、そこに登場する顔のない人物の感情にふさわしい表情を選択させる方法をとった。これが、低年齢児に対する共感の測定を有効にしたと考えられる。また、得点分布は適度のバラツキをもっており、能力差を見出し、検討する上でも有効な測定方法であったといえる。本研究の共感得点に反映された能力は、Feshbach のモデルの第1、第2、第3のすべての要素を総合した共感能力であると考えられる。菊池 (1982) は、2才ごろから情動的な反応性が顕著になり、4、5才ごろには他人の情動の弁別、命名能力が見られるようになり、7才にいたっては、他人の考えが予測できるようになることを指摘している。本研究においては、確かに共感が加齢とともに変化し、向上していることが明らかにされた。ただし、他人の考えというよりは、感情を測定することが意図されたため、自分と異なる存在としての他人をどれほど意識しているかについては、明らかにしていないといえる。

感情別共感得点に関して、平均の高い順に並べると、「喜び」「驚き」「悲しみ」「怒り」であった。認知得点の平均においては、「怒り」が最も高い値を示していたが、共感得点においては、最も低くなっていることが注目される。これは、「怒り」の場面において女子は「悲しみ」を選択するものが多かったためと考えられる。分散分析の結果からも、「喜び」「悲しみ」「驚き」は学年の主効果が見られているが、「怒り」については性差のみがみられ、特に、男子が高い値を示していることから、「怒り」の感情が他の3つの感情と異なった性格のものであり、他の感情よりも社会的変数の影響を受けやすいと思われる。即ち、「怒り」は女子においては社会的望ましさの影響から感情表出として抑制されることが多いのに対して、男子は男らしさの1つとして怒りの表出の許容性が高いことが、このような結果をもたらしたと考えられる。その意味で、共感の芽が、すでに幼少期から社会の影響を受けていることが示唆される。

研 究 II

幼児の共感性は、幼児期においていちばんコミュニケーション、及び相互作用の多い母親からの影響が大きいと考えられる。すなわち、母親の感情、態度、価値観、のモデリング、及び同一視などによる一体化現象が共感

に強い影響を及ぼしていることが予測される。したがって、母親の共感性が高いほど幼児の共感性が高くなると考えられ、それについて検討する。

方 法

1. 母親の共感調査

被験者) 幼稚園児をもつ母親 235 名 (26才~42才) であり、そのうち 127 名は被験児の母親であった。年少児の母親：28才から38才、48名 (平均年齢32.46)、年中児の母親：26才から40才、95名 (平均年齢33.02)、年長児の母親：27才から42才、101名 (平均年齢33.72)、研究 I で用いられた被験児。

調査期日) 10月

調査材料) Mehrabian & Epstein (1972) の情動的共感性尺度33項目を翻訳、一部修正したものが作成された (TABLE 5)。各回答は、「まったくそうである」から「まったくそうでない」の5件法で実施された。

調査方法) 質問用紙は封筒に入れ、各クラスの担任の先生から子どもを介して母親に渡された。調査は無記名であったが、封筒に番号をつけ、後で子どもと照合できるようにされた。258名中235名から回収が得られ、回収率は91%であった。

分析方法) 母親の共感についての調査項目のうち、TABLE 5 において (+) と示されている項目については、「まったくそうである」が5点、「そうである」が4点、「どちらでもない」が3点、「そうでない」が2点、

TABLE 5 各項目の因子負荷量

項 目 概 要	因 子		
	I	II	III
1. ひとりぼっちでいる人を見るとかわいそうになる (+)	.42		
7. 友人が困っているとすぐに同情してしまう (+)	.50		
8. ラブ・ソングの歌詞に深く心を揺り動かされる (+)	.45		
9. 相手に悪い知らせを伝える時こちらの気持も乱れる (+)	.50		
14. 贈り物をして相手が喜ぶのを見るのが好き (+)	.41		
16. 他の人が泣いているのを見ると私も泣きだしたくなる (+)	.52		
17. 聴いたり歌ったりすると幸せな気分になることがある (+)	.48		
18. 小説を読んでいると登場人物の気持ちになりきる (+)	.60		
19. 誰かが惨い扱いをされているのを見たくない (+)	.42		
27. 動物が痛がるのを見るとかわいそうで見えられない (+)	.42		
28. 本や映画に話に引き込まれるのはばかげている (-)	.42		
31. 映画を見るとその内容に引き込まれ夢中になる (+)	.55		
4. しょげてばかりいる人とは関わりたくない (-)	.42		
6. 大げさに喜ぶ人を見るとばかげていると感じる (-)	.42		
11. 私がつきあっている人のだいたいはクール (-)	.45		
20. 周りの人が心配していても平気でいられる (-)	.45		
22. 他の人の笑いが自分に移ったりしない (-)	.43		
26. ひどくうらたえている人を見かけても、理解できない (-)	.53		
30. 誰かが泣いているのを見ると同情するよりいらいりする (-)	.51		
5. 周りの人達がいらいらしていると私もいらだつ (+)			.54
10. 私の気分は周りの人達によって影響をうけやすい (+)			.70
13. 友人がとりみだしていても、私は動揺しない (-)			.47
24. 他の人の感情に影響されずに決断することができる (-)			.56
25. 周りの人達が気落ちしていると私まで憂うつになる (+)			.49

注：.40以上の負荷量にない項目、2, 3, 12, 15, 21, 23, 29, 32, 33は除かれた。

TABLE 6 母親の共感得点と子どもの共感得点

	高共感群	低共感群
年少 (N=17)	19.7(7)	16.9(10)
年中 (N=13)	20.6(5)	18.1(8)
年長 (N=10)	19.8(6)	21.8(4)
全体 (N=40)	20.0(18)	18.2(22)

() 内は人数

「まったくそうでない」が1点として計算された。(一)の項目については、得点化の方向が逆にして計算され、各項目ごとの得点を合計したものを、母親の共感性得点とした。

結 果

TABLE 6 をもとにして、母親の共感性得点の結果と研究 I で見られた子どもの共感得点との関係が見られた。母親の共感得点と子どもの総合共感得点との間には有意な相関は見られなかったが ($r=.02$, $p>.81$)、母親の共感得点を高共感群と低共感群に分けて、子どもの共感との関係が見られた。高共感群は、共感得点の平均の1SD以上 (130点以上) のものとし、低共感群は平均の1SD以下 (106点以下) とした。分散分析の結果、有意な差が見られた ($F=7.21$, $df=1/38$, $p<.05$)。高共感群の母親をもつ子どもが低共感群の母親をもつ子どもよりも共感得点が高い傾向が明らかになったといえる。次に、年少、年中、年長と年齢別に母親の共感得点と子どもの共感得点との関係が見られたが、年長児を除く年齢群において高共感群の母親をもつ子どものほうが低共感群の母親をもつ子どもよりも共感得点が高かった ($F=9.72$, $df=1/15$, $p<.01$; $F=6.08$, $df=1/11$, $p<.05$)。次に、子どもの感情別共感得点との関係が見られたが、「喜び」「驚き」にのみ有意な差が見られた ($F=3.56$, $df=1/38$, $p<.07$; $F=5.16$, $df=1/38$, $p<.05$)。いずれも、高共感群の母親をもつ子どものほうが共感得点が高かった。

つぎに、母親の共感の因子分析を行った。主因子法で、バリマックス回転後、3つの因子を抽出した。項目選択基準は、因子負荷量 .40 以上とした。TABLE 5 に各項目の因子負荷量が示されるが、各因子はそれぞれ以下のように命名された。中学生、高校生、大学生を対象にした加藤ら (1980) の因子構造と類似した結果が得られたため、因子名もそれに準じた。即ち、第1因子「感情的暖かさ」、第2

因子「感情的冷淡さ」、第3因子「感情的被影響性」であった。これらの因子と子どもの認知得点、及び共感得点との相関が分析されたが、有意な相関は認められなかった。次に、各因子の得点の平均値より 1SD 高い高得点群と 1SD 低い低得点群とに分けて、子どもの共感得点と、感情別共感得点との関係が分散分析により検討された。その結果、「感情的暖かさ」の因子にのみ有意な差が見出された ($F=4.19$, $df=1/46$, $p<.05$)。即ち、「感情的暖かさ」の高い母親をもつ子どものほうが「感情的暖かさ」の低い母親をもつ子どもよりも共感性が高いことが示された。

考 察

母親は、乳・幼児期において最も影響力の大きい存在であることが一般にいわれている。すなわち、同一視やモデリングの対象として、また、強化を与えるものとして重要な働きをしていると考えられる。したがって、本研究でも共感の発達に影響を及ぼす要因として母親の共感をとりあげ、子どもの共感性との関係が検討されたわけであるが、その結果、母親の共感と子どもの共感との相関関係は見られなかったものの、共感性の高い母親をもつ幼児のほうが、共感性の低い母親をもつ幼児よりも共感性が高い傾向が認められた。相関関係が見られなかったのは、幼児の共感に発達傾向が見られるのに対して、母親の共感にはほぼ固定しており、直線的関係をもたないからであろう。あるいは、母親の共感の測定に Mehrabian et al. (1972) のものが用いられたが、これは情動的共感を測定するものであるため、母親の共感の認知的側面については測定されていないことも考えられる。すなわち、母親の共感と子どもの共感の次元が異なっていたことが考えられる。そのため、今後は母親の共感の認知面をも含めた共感性を測定し、子どもの共感との関係が見られるべきであろう。しかし、結果全体からは、母親の共感の高いものと低いものとを比較すると、思いやりの心をもち、他人の感情を自分のものとして感じることで母親に育てられた子どもは、やはり、母親と類似した共感性の高い子に育つことが示唆され、意義深く思われる。感情別には、「喜び」と「驚き」に差が見られたが、「怒り」や「悲しみ」よりもどちらかといえばポジティブな傾向のものが幼児に影響を及ぼしやすいことが示唆される。また、因子においても「感情的暖かさ」という、やはりポジティブな面において母親の子どもに与える影響が大きいことが認められ、母親の安定した愛情が幼児期にいかにか大切なものであるかが実感される。ポジティブかネガティブかという点について考えると、幼児は「怒り」や「悲しみ」などのネガティブな感

情よりも、「喜び」や「驚き」などのポジティブな感情を母親に求める欲求が強く、母親のポジティブな表情に大きな感動と満足感を得るとともに自分の共感性を発達させていくように思われる。

要約及び今後の課題

これまで測定が難しいために敬遠されていた幼児の共感について検討した。研究Ⅰでは、3才から6才児を対象に、「喜び」「悲しみ」「驚き」「怒り」の4つの表情が描かれたカードを提示し、その弁別能力がまず測定された。つぎに、4種類の感情のおのおのについて3場面、計12場面がやはり絵カードにされてストーリーとともに提示された。そして、各場面中の主人公の気持を示す表情のカードが先の4つの中から選択するように求められた。これが、共感得点として共感の指標にされた。その結果、表情の弁別能力及び共感のいずれもが幼児においても既に見られることや、年齢が上がるにつれて発達することが明らかにされた。特に、共感に関しては年齢差が大きく成長の著しいことが認められたほか、年長児になると性差が現れることが示された。ただし、性差は一概に女兒が男児よりも共感性が高いという結果が示されたわけではなかった。また、研究Ⅱでは、母親の共感が質問紙調査により測定され、幼児の共感との関係が検討された。その結果、共感性の高い母親をもつ幼児のほうが、共感性の低い母親をもつ幼児よりも共感性が高いことが明らかにされた。特に、感情別には「喜び」「驚き」の感情においてその差が顕著であった。また、母親の共感には「感情的暖かさ」「感情的冷淡さ」「感情的被影響性」の3つの因子が見出されたが、そのうち「感情的暖かさ」が幼児の共感に大きな影響を及ぼしていることが示唆された。

問題点としては、本研究でとらえられた共感がはたして幼児の情動及び認知の双方を含みうるものであったのかどうかについてであろう。幼児期においては自他の区別がまだ未分化なときであり、共感というよりも自己中心的で一方的な自分の感情とのすり替えであるような気がしないわけではない。また、幼児の少ない経験量の違いが「共感」の差として測定されたといえるかもしれない。また、本研究では感情として4種類が選択されたが、幼児の共感しうる感情の種類についての新しい研究はほとんどないため、今後この方面の研究が望まれる。さらに、「怒り」などの感情表出は女兒においては、男児よりも社会的許容性が低いため、実験結果に社会的望ましさの影響が反映されたことが考えられる。

その他、母親の共感の次元と子どもの共感の次元との

関係や、母親だけではなく父親の共感との関係も (Kalliopuska, 1984), 今後検討されるべきであろう。

引用文献

- Batson, C.D., Duncan, B.D., Ackerman, P., Buckley, T., & Brick, K. 1981 Is empathic emotion a source of altruistic motivation; *Journal of Personality and Social Psychology*, **40**, 290—302.
- Berger, S.M. 1962 Conditionning through vicarious instigation. *Psychological Review*, **69**, 450—456.
- Borke, H. 1973 The development of empathy in Chinese and American children between three and six years of age. *Developmental Psychology*, **9**, 102—108.
- Dymond, R.F. 1949 A scale for the measurement of empathic ability. *Journal of Consulting Psychology*, **13**, 127—133.
- Feshbach, N.D. 1975 The relationship of child rearing factors to children's aggression, empathy, and related positive and negative social behaviors. In De Wit, J. (ed.) *Determinants and Origins of Aggressive Behavior*, 427—436. The Hague, Neth: Mouton.
- Feshbach, N.D. 1976 Empathy in children. paper given at the Western Psychological Association meetings, Los Angeles.
- Feshbach, N.D., & Roe, K. 1968 Empathy in six and seven-year-olds. *Child Development*, **39**, 133—145.
- Izard, C.E. 1971 *The face of emotion*. New York: Appleton-Century Crofts.
- Izard, C.E., & Dougherty, 1982 Two complementary system for measuring facial expression in infants and children. In C.E. Izard (Ed.), *Measuring Emotions in Infants and children*. Cambridge University Press.
- Kalliopuska, M. 1984 Relation between children's and parents' empathy. *Psychological Reports*, **54**, 295—299.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究 **2**, 33—42.
- 菊池章夫 1982 家庭と子どもの社会化 祐宗省三編 子どもの社会心理 1 家庭 金子書房 168—207.
- Krebs, D. 1975 Empathy and altrurism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 1134—1146.
- 久保ゆかり・無藤隆 1984 気持ちの理解における類似経験の想起の効果 教育心理学研究 **32**, 296—305.
- Mehrabian, A., & Epstein, N. 1972 A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, **40**, 525—543.
- Milgram, N.A. 1960 Cognitive and empathic factors in role-taking by schizophrenic and brain damaged patients. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **65**, 219—224.
- 大脇義一 1971 増補版 感情の心理学 培風館
- Schlosberg, H. 1941 A scale for judgement of facial expression. *Journal of Experimental Psychology*, **29**, 497—510.
- Stotland, E., & Walsh, J. 1963 Birth order in an experimental study of empathy. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **66**, 532—554.
- Stotland, E., & Dunn, R.E. 1963 Empathy, self-esteem and birth order. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **16**, 532—554.
- Strayer, F.K. 1960 Empathy and social perception. *Dissatation Abstracts*, **21**, 244.
- 高野清純 1982 愛他心の発達心理学 有斐閣
- Walden, T.A., & Field, T.M. 1982 Discrimination of facial expressions by preschool children. *Child Development*, **53**, 1312—1319.
- Woodworth, R.S. 1938 *Experimental Psychology*. New York. Holt, Rinehart and Winston, Inc. 180.

付 記

本研究の実施にあたり、ご協力下さった幼稚園の先生方、及び園児の皆様から感謝致します。なお、本論文の作成にあたり、筑波大学心理学系高野清純先生に深く感謝致します。

(1986年7月1日受稿)